

宇陀を駆けた人々

17 森野賽郭 篇 2

薬園の発展

山野で薬草を採集する役目の採薬使は、全国各地に点在する江戸幕府領内の薬用資源の調査・採集のため、各地を訪れました。宇陀松山の森野賽郭は、享保14年（1729）の調査をはじめ、享保17年（1732）の伊勢・紀伊・大和・若狭・越前・美濃の調査、享保20年（1735）の三河・伊勢・志摩・伊賀・大和の調査、寛保3年（1743）の伊勢・美濃・近江の調査にも採薬使の植村左平次に随行しました。

こうした採薬調査に協力した功績により、享保14年（1729）以降、幕府から貴重な薬草木が賽郭に与えられました。元文5年（1740）の森野薬園の植物目録では、薬草木は128種を数え、薬園が着実に整備されてきたことがわかります。

賽郭は、採薬調査が進むとともに江戸へ赴く機会も増え、植村や平賀源内、幕府の医官らとの交流を通じて生薬の鑑別や栽培技術の工夫に努め、自身の薬園を充実させていきました。この頃、植村は、江戸駒場

御薬園預かりとなっており、その関係から、賽郭の薬園は次第に幕府官園の補助機関としての役割を担っていききました。

賽郭は、寛延2年（1749）に家督を息子の武貞に譲りました。賽郭は、薬園内の高台に「桃岳庵」という建物を建て、ここで薬園を見守る傍ら、本草の研究に打ち込みました。その研究の集大成といわれているのが、賽郭自身の細密な描写による彩色動植物図譜『松山本草』全10巻です。いろいろな動植物などが丁寧・正確に描かれています。

薬園は次代へと受け継がれ、発展の道を歩みます。武貞は、幕府の薬草御用として薬園で栽培する薬草の種類を増やし、生産・加工する薬種を大坂や京都の薬種商に広く販売しました。



文・柳澤一宏（文化財課）



「LGBTQ」性のありようは人それぞれ

私たちの社会には様々な「ちがひ」をもつ人たちが暮らしています。

例えば性別についても単純に「男性」と「女性」では語れない、多様な性のありようをLGBTQという言葉で表されることがあります。

これらは、同性が好きな女性「レズビアン」、同性が好きな男性「ゲイ」、両性に魅かれる人「バイセクシュアル」、出生時とは異なる性で生きる人「トランスジェンダー」、わからない、典型的な男・女ではないと感じる人「クエスチョニング」の頭文字をとって名付けられており、性自認、性的指向のあり方が少数者である人（性的少数者）の総称です。

また、体の発達が他の人とは少し異なる男性や女性、身体の性に違和感がある人も少なくありません。本来、性のありようは多層になっており、多様で生涯にわたって流動的なものだと言われています。

2016年、株LGBT総合研究所の調査によると、性

的少数者に該当する人は約8%というデータがあります。これは、左利きやA型B型の血液の人よりも多い割合となります。

彼らの多くが、学校や職場、社会生活の中で不便や困難を感じた経験や、偏見や差別により、生きづらい思いをしていることを理解することが必要です。性の問題は、特定の人だけの問題ではなく、まさに人権問題なのです。

誰もがありのままを受け入れられ、自分らしく生きたいと望んでいます。大切なのは、世の中には男／女しかないという思い込みや、男／女らしくという押しつけや決めつけをやめ、多様な性のあり方を認め合うことです。

「誰もが自分らしく生きられる社会」実現のために。

